白き山嶺の果て

jinjin

プロローグ　日守山にて

日守山の斜面には、春の匂いが始まっていた
伊豆の春は駆け足で訪れる
踏み慣れた土の感触
低い木々の間を抜ける風はやわらかく、どこか湿り気を帯びている
幾分か歩を進めると視界が開け
そこには光を浴びた田方平野の先に、富士があった
雪をまとった稜線が、静かに空に浮かんでいる
遠いはずなのに、なぜか近く感じる
「……やっぱいいな、ここ」
ノブが隣で腰を下ろす
昔から変わらない仕草だった
「ああ、変わらないな」
ジンも同じように座る
しばらく、言葉はなかった
風が草を揺らし、その音だけが流れる
「で、ほんとに行くのか」
ノブがぽつりと言った

「剱」
その一言で空気が動き出す
ジンは富士を見たまま、答えない
代わりに、小さく息を吐いた
「簡単じゃないぞ、あそこは。しかも残雪期と言っても雪は深く、気温も低く、風が吹けば命の保証はない」
ノブの声は憂いに溢れその中に重みを混じる
「分かってる」
ジンの言葉は短い返事だった
「じゃあ　なんでだよ！」
問いはまっすぐだった
ジンはすぐには答えられなかった
視線の先、富士の稜線をなぞる
あの山も、何度も登ってきた
富士を見ながら返す言葉は
「……分からない」
ぽつりと、そう言った
ノブが笑う
「なんだそれ」

「でも、行かなきゃいけないんだ」
言葉にしてみると、それはひどく重みがあった
ノブは少しだけ黙り、同じように富士を見上げる
「……そうか」
否定はしない
それがジンとノブの関係だった
「気をつけろよ」
それだけ言う
「ああ」
ジンが短く返す
風が、二人の間を抜けていく
この穏やかな山と、これから向かう剱
まるで別の世界だ
それでもどこかで繋がっている気がした
ジンは立ち上がる
もう一度、富士を仰ぎ見る
その姿は静かではあるが、内に秘めた強い意志が感じられた
「行ってくる」
誰に向けた言葉でもない

ノブは手を振るでもなく、ただ頷いた

第一章　白き尾根への再会

夜明け前の馬場島は、まだ冷えきっていた
吐く息が白く、音もなく宙に溶けていく
静寂の中に靴音だけが響く
先に着いたのは、ジンとエコだった
静岡からの移動を終え、二人は黙って山を見上げている
闇の向こうに浮かぶ剱の稜線は、わずかな光を受けて鋭く切り立っている
「……何時もの姿だ」
ジンが低く呟く
エコは頷いた
「その姿はこっちが試されている気がする」
そのとき、遠くから声が弾んだ
「おーい！」
東北組の到着だった
福島からmoroと末吉、宮城からHARIBOとやま

長距離を移動して来た疲れも見せず、どこか高揚した空気をまとっている
「やっと揃ったね」
moro が笑う
その声には、再会の安堵とこれからへの期待が混ざっていた
HARIBO は少し照れたように手を振る
「ほんとに来ちゃったね、剱」
やまはすぐに装備を整え始める
「予定通り進めよう。時間は大丈夫？」
末吉はすでにカメラを構えていた
「この瞬間、絶対残しときたいんだ」
その無邪気さに、場の空気が少し和らぐ
ジンは一歩前に出た
全員の顔をゆっくり見渡す
「それぞれの思いが募る剱だ。ここに来たのは、ただ登るためじゃない」
風が、尾根の方から吹き降りてくる
一瞬の沈黙
あの日、上高地で交わした言葉
必ず、また山で会う
次は剱で

その約束が、ここに六人を集めた
絆を深める為に来た山だ
やがて東の空がわずかに白む
剱の輪郭が、はっきりと姿を現したように感じた
だが、決して容易ではない
ジンはザックを背負い直す
「行こう」
その一言に、全員の足が動いた
雪をまとった早月尾根へ
それぞれの想いを背負って歩き出した六人の背後には「試練と憧れ」の碑の文字がくっきりと浮かび上がっていた

第二章　早月小屋の夜

目の前には剱へ真っすぐ伸びる長大な尾根が待っていた
ブナや立山杉が生い茂る樹林帯は、朝の冷たい空気に包まれている
鳥のさえずりだけが静かな森に響き、足元には湿った土の匂いが漂う
「まだ始まったばかりなのに、もう急だな」

末吉が息を切らせる
「今日は焦らない。一定のペースで行こう」
エコが後ろを振り返る
汗が額を流れ始めるころ、松尾平に着く
「ここまでは剱は歓迎してくれているみたい」
HARIBO が笑う
「この先が本番だけどね」
moro の一言に全員が苦笑した
松尾平を過ぎると、道は再び容赦なく斜度を増した
木の根をつかみ、岩を越え、一歩ずつ標高を稼いでいく
振り返れば、馬場島は遥か眼下
遠く富山平野が夕日に染まり始め、黄金色の光が尾根を包み込んでいた
荒い息と登山靴が土を踏む音だけが、静かな山に吸い込まれていく
やがて稜線の向こうに早月小屋の赤い屋根が見えた
「あった……」
やまの柔らかい声で全員の足取りが少しだけ軽くなった
しかし、本当の試練は、これから始まる
残雪期の早月尾根は春の名を裏切るような風を纏っていた
それは、ただの風ではない

体温を奪い、思考を鈍らせる刃のような魔物
夕暮れとともに、気温は一気に落ちていった
残雪の斜面に張られたテントは、薄い布一枚で世界と隔てられているにすぎない
風が吹くたび、フライが乾いた音を立てて震えた
その音は、夜が深まるほどに鋭くなる
三張り張られたテントの中で、それぞれは身を寄せ合うようにして座っていた
ストーブのわずかな熱も、外の冷気には追いつかない
「……寒いね」
HARIBO が肩をすくめる
声が白くなりそうなほどだった
「これでもだいぶマシなほうだよ」
moro が笑うが、その吐息も震えている
エコは静かに温度計を確認する
「氷点下。風がある分、体感はもっと低いね」
やまは淡々と手袋を替え、濡れを避ける動作を繰り返す
「手、出しっぱなしにしないで。感覚なくなるから」
末吉はシュラフに潜り込みながらも、カメラを抱えたままだった
「この状況でも撮りたいって思う、我ながらどうかしているよ」
誰かが小さく笑ったが、すぐに風の音にかき消された

ジンは入口側に座り、外の様子をうかがっていた
ファスナーの隙間から入り込む冷気が、容赦なく頬を刺す
「明日は、もっと厳しい」
低い声だった
その言葉に、誰も軽く返せない
沈黙が落ちる
風の音だけが、不規則にテントを揺らす
やがて、それぞれがシュラフに潜り込む
だが眠れない
身体中が冷える
指先の感覚が、じわじわと遠のく
身体を丸めても、冷気はどこかから入り込んでくる
「……ねえ」
闇の中で、HARIBO の声がした
「ちょっと、怖いかも」
間を置いて、moro が答える
「うん。わかるよ」
短い言葉だが、それで十分だった
エコが続ける

「怖いって思えているなら、大丈夫。無茶しないで済むから」
やまも静かに言う
「明日は慌てないで進もう。焦らないで。ゆっくりと」
その声の連なりが、わずかに空気を和らげた
ジンは目を閉じたまま、言った
「一歩ずつでいい。それだけ守れば、頂には届く」
誰も返事はしなかった
だが、その言葉は確かに全員に届いていた
外では風が唸り続けている
雪を巻き上げ、尾根を削るような音
その中で、六人はそれぞれの不安と向き合っていた
眠りは浅く、何度も目が覚める
そのたびに感じるのは、凍てつく現実と、すぐそこにある明日だった
夜は、長かった

第三章　崩れた一歩

朝の斜面は、刃のように硬かった

アイゼンの歯が氷を噛む音だけが、乾いて響く
「間隔、保て、確実に歩め」
ジンの声が風を切る
隊列は言葉を失い静かに足場を一つずつ刻んでいた
その時だった
ドンッ 鈍い音が周りの空気を切り裂く
末吉の足元が崩れた
「うわっ！」
踏み抜いた
雪が崩れ、体が宙に浮く
視界が反転し、空が切り裂かれ流れる
止まらない
言葉ともならない叫びが遠ざかる
ピッケルを振るう
しかし刺さらない
加速だけが増していく
「末吉ぃぃ！！」
「打てぇ！！」
ジンの声が、一直線に走る

「体を斜面に押しつけろ！　ピッケルを叩き込め！打てぇぇ！！」
その一言で末吉は身体をねじり、全体重を乗せてピッケルを打ち込んだ
雪面にピッケルが食い込む
ギシッッ。衝撃。腕が軋む
それでも押し込む
やがて、速度が落ちていき
そして……止まった
荒い呼吸だけが残った
「……止まったか」
「……とっ…止まった…」
だが、位置は斜面の中腹
ルートから大きく外れていた
足場は不安定で、再び滑れば止まる保証はない
ジンの目が鋭く状況を捉える
「そのまま動くな」
即座にザックを下ろし、ザイルを引き出す
やまが無言で近くの岩にスリングを回し、支点を作る
エコが結びを確認する
「支点、取れた。いける」

動きに無駄はない
言葉は短く、正確だった
ジンがロープを結び、末端を握る
「末吉、今からザイルを入れる。視界に入ったら掴め」
「……おおっ」
風を読んで、腕を振る
ザイルが弧を描き、白い斜面へ落ちたが思うように届かない
「くそっ！もう一度いく！」
二投目。今度は、末吉のすぐ脇に落ちた
「見えた！」
「よし、体に巻け。簡易ハーネスでいい。確実に締めろ」
震える手で、末吉はロープを腰に回すがうまく結べない
「落ち着け。ゆっくりでいい」
ジンの声が、焦りを押さえ込む
やがて、結びが完成した
「……できた」
「よし。テンションかけるぞ」
ジンとやま、エコがロープに力をかける
張力が生まれ、末吉の身体がわずかに持ち上がる

「足場を作れ。蹴り込め」
末吉はアイゼンを蹴り込み、雪面に段を作る
一歩
ロープが引かれる
もう一歩
体が、少しずつ上がる
moro が声をかけ続ける
「いいよ、いい、そのまま、いける。末吉ならば登って来れる。絶対に出来る！」
HARIBO は祈るように熱い瞳で見つめていた
時が過ぎていき呼吸が荒くなる
その時、手がルートの縁に届いた
「そこだ、掴め！」
ジンが一気に引き上げる
やまが腕を取り、エコが支える
次の瞬間、末吉の身体は斜面の上にあった
誰もすぐには動けなかった
ただ、現状を把握するかのように見つめる
末吉は雪の上に崩れ落ちていた
肩を震わせ、息を吐き、言葉にならない声を発する

「……生きてる」
その言葉に、全員がようやく息をついた
ジンは短く言う
「良く止めた。落ち着け。息を整えろ。しっかり足元を見ろ」
末吉は何も返せない。早く浅い息を繰り返しながら、ただ頷いた
恐怖は消えない
暫く時が宙を駆け巡る
幾何の時が流れただろう
闇を切り抜く様にジンが絞り出すような声で全員を促す
「よし。行くぞ！ここで滞留する事は夢を、命を亡くすことだ。行くしかない！」
再び歩き出す六人の足取りは、重い
けれど力強い歩みだった
一歩の意味を、誰もが知ったからだ

第四章　雪に埋もれた道標

風は、刃だった
それは彼らを拒絶するように吹き荒れていた

肌を刺すというより、存在そのものを削り取ろうとするかのような冷気
剱は、甘えも躊躇も許さない
標高を上げるにつれ、空気はさらに冷たく鋭さを増していった
風は細いが確実に体温を奪っていく
足元の雪は硬く締まり、その下に氷を抱えている
一歩ごとに神経を使う斜面
だが、本当の敵は別にあった
冷えだ
指先が、じわじわと感覚を奪っていく
最初はただの冷たさだった
それが、やがて〝何も感じない〟へと変わる
「……指、動く？」
エコが低く問う
HARIBOは手袋越しに拳を握る
「……ちょっと、鈍い」
やまがすぐに言う
「止まろう。ここで一回、対処しよう」
ジンも頷いた
「しかし長くは止まれない。手早くやるぞ」

全員が風を避けるように体を寄せる
だが、完全に防ぐことはできない
グローブを外すと、冷気が牙を剥いた
「……っ！」
HARIBO が息を呑む
露出した指先が、一瞬で刺すような痛みに包まれる
「無理にでも動かせ」
ジンの声が鋭く飛ぶ
「握って、開け。血を回せ」
言われるままに、指を動かす
だが、思うように動かない
末吉もまた、手を見つめていた
「……感覚、ねえな」
さっきまでの滑落とは別の恐怖が、静かに広がる
moro が強く言う
「まだ。動かし続けて。繰り替えして何度でも」
やまは素早く予備の手袋を取り出す
「濡れているならば交換するよ」
エコが冷静に判断する

「このままだとまずいよ。行動しながら回復させるしかないと思う」
ジンは全員を見渡した
その目は、状況を正確に受け止めている
「いいか、ここで止まれば終わる。もちろん〝終わる〟の意味は分かるな」
低く、しかし確信のある声
「動き続ける。手も足も、止めるな」
再び歩き出す
だが、感覚のない指は岩も鎖も掴んでいる実感がない
滑る。怖い。力が入らない
雪に埋もれた鎖を掘り出す作業も、容易ではなかった
冷たい鉄に触れた瞬間、痛みとも何とも言えない感覚が走る
「ここだ、鎖がある」
ジンが雪を払う
だが、その鎖を握る手が震える
「……掴めているか分からない」
HARIBO の声が揺れる
「視覚で確認して」
エコが即座に返す
「感覚に頼らないで」

やまが横から支える
「大丈夫、ここに足置ける」
moro は絶えず声をかけ続ける
「いいよ、そのまま。焦らなくていい」
末吉は歯を食いしばりながら、鎖に手をかけた
指先はもう、自分のものではないようだった
それでも離さない
冷えは、静かに、確実に体力と気力を奪っていく
痛みすら感じなくなったその先にあるものを、全員が理解していた
凍傷
それは〝気づいた時には遅い〟ものだ
だからこそ、止まれない
一歩
また一歩
呼吸を荒げながら、血を巡らせるように体を動かす
やがて、動き続けたことによってわずかに指先に痛みが戻る
「……戻ってきた」
末吉が呟く
その一言に、張り詰めていた空気がわずかに緩む

だが、誰も油断しない
ここは剱
気を抜いた瞬間、すべてを奪う山だ
六人は感覚を失いかけた手で鎖を掴み、震える足で雪面を蹴り込みながらも進む
道は、まだ続いている

第五章　頂に立つ理由

最後の雪壁を越える直前、ジンは足を止めた
呼吸が荒い
冷気で肺の奥が焼けるように痛む
頬を打つ風は鋭く、汗ばんだ身体の熱を容赦なく奪っていく
それでも、あと少しだ
背後では、アイゼンが雪を噛む音が断続的に響いている
末吉の荒い息
エコが静かに後方を見守る気配
HARIBO の小さな呼吸
moro の「大丈夫、落ち着いて」の声

やまが足場を確認する音
その全部が、ジンの背中に届いていた
振り返る
五人がいる
雪煙の向こうで、それぞれ疲れ切った顔をしている
唇は乾き、頬は赤く焼け、目だけが強く光っていた
ここまで、本当に長かった
凍てつく夜
眠れなかったテント
雪に埋もれた鎖
感覚を失っていく指先
そして……末吉の滑落
ザイルを握り締めた感触が、まだ掌の奥に残っている
もし、あの時
その先を考えかけて、ジンは小さく息を吐いた
全員、生きてここにいる
今は、それだけでいい
「……行くぞ」
声は掠れていた

誰も返事はしなかった
けれど、その沈黙が答えだった
一歩
雪を踏みしめる
その感触が、やけに深く身体へ響いた
もう一歩
傾斜が、ふっと消える
空が、開けた
剱　山頂
誰も、すぐには動けなかった
ただ立ち尽くす
風が吹いている
遠く、白く連なる北アルプスの山
空はどこまでも高く、青かった
あまりにも静かだった
その静けさが、逆に胸を締めつける
ジンは息を吸う
冷たい空気が肺を満たす
その瞬間だった

胸の奥に押し込めていたものが、一気に溢れた
怖かった
本当は、ずっと
末吉が滑り落ちた瞬間、終わるかもしれないと思った
凍えていく仲間の指先を見ながら、判断が遅れれば取り返しがつかないと思った
リーダーとして、間違えられない
その重さを、ずっと背負っていた
だが今、五人がここにいる
誰一人欠けることなく
それを見た瞬間、張り詰めていたものが、音を立てて崩れた
ジンは思わず顔を伏せた
雪の白さが滲む
最初に口を開いたのは、末吉だった
「……俺、もう駄目かと思っていた」
ぽつりと落ちた声は、風に溶けそうなほど小さい
「滑った瞬間、終わったって思った。でも……みんなの声、ずっと聞こえていた」
末吉は涙を拭いながら笑った
「だから、戻ってこれた気がする」
moro が目元を押さえながら、優しく笑う

「ほんと手のかかる弟みたいだったよ、あんた。でも素敵な弟だから喪いたくないと祈っていた」
その声は震えていた
「……六人でここに立ててよかった。ほんとによかった」
HARIBO はしゃがみ込み、雪に触れたまま泣いていた
「怖かった……ずっと怖かった……」
肩を震わせながら
「でも、みんながいたから歩けた。ひとりだったら、絶対ここまで来れなかった」
やまは静かに空を見上げていた
「山ってさ……結局、人なんだね。仲間なんだね」
誰に向けた言葉でもない
「景色とか頂上とかじゃなくて、誰と歩くかなんだって、今わかった気がする」
エコはゆっくりとゴーグルを外した
赤くなった目を隠すように息を吐く
「苦しかった……ほんとに」
静かな声だった
「でも、こんな苦しさなら、また歩きたいって思う」
その言葉に、誰もが小さく頷いた
ジンは五人を見つめる
笑っている

泣いている
肩を叩き合っている
その姿を見た瞬間、胸にひとつの想いが静かに落ちた
この頂きにこの仲間たちと、ここへ来たかったのだ
怖くても
苦しくても
立ち止まりそうになっても
その全部を越えて、一緒にここへ辿り着きたかった
頂に立つ理由
それは景色じゃない
達成感でもない
仲間と、生きてここへ辿り着くこと
ただ、そのためだった
風が、六人の間を静かに吹き抜ける
その風はもう、冷たくはなかった
「ほんと、よくここまで来たね……」
エコはそう呟くと、ゆっくり空を見上げた
涙で濡れた頬に、風が触れていく
ジンは吐露する

「苦しかったし、際どかった、何回も心折れそうになった。でも……」
一度言葉を切り、五人を見渡す
「みんなで笑ってここに立てた、それで全部報われる気がする」

第六章　カニのヨコバイ

山頂の静けさは、長くは続かなかった
下山。その言葉が、再び六人の表情を引き締める
目の前に現れたのは、細く横に伸びる岩の帯
その先にあるのが、カニのヨコバイ
足場はわずか
下を見れば、底の見えない空間が口を開けている
「ここからが、もう一つの本番だ」
ジンの声は、登りの時よりも低かった
末吉は岩に手を置き、そっと覗き込む
「……これ、落ちたら止まらないやつだ」
決して、冗談ではない
「三点支持、絶対に崩すな」

ジンの指示が全員に行き渡る
一人ずつ、横へ
身体を岩から離し
指先は少しの窪みを確実に掴み
足は、わずかな突起を探り当てるしかない
風が吹く
バランスが、わずかに揺れる
「……っ」
HARIBO の呼吸が乱れる
「目線は岩。下を見ないで」
やまが静かに言う
moro がすぐに続ける
「大丈夫、そこ足置けるよ」
エコは後ろから間隔を保ち、確実にルートを指示する
ジンは先頭で全体を見ながら、タイミングを計る
末吉は歯を食いしばりながら進んでいた
滑落の記憶が、指先に蘇る
それでも、止まらない、止められない
一歩

また一歩
やがて……
「抜けた！」
誰かの声が、張り詰めた空気を破る
全員が通過したとき、初めて大きな息を吐いた
だが、その安堵は束の間だった

第七章　カニのタテバイ、そして解放

次に現れたのは、ほぼ垂直の岩壁
鎖と鉄のステップが、下へと続いている
カニのタテバイ
「……今度は降りか」
末吉が小さく呟く
見下ろせば、吸い込まれるような高度感
足場は見えるが、そこに乗れる保証はない
「一段ずつ、確実に」
ジンの声が、静かに落ちる

最初の一歩を踏み出す
体を外に預けるような姿勢
鎖を握る手に、全体重がかかる
ギシッ、と金属が軋む音
それがやけに大きく響いた
HARIBO が息を詰める
「怖い……」
「ゆっくりでいいよ」
エコの声が背中を支える
やまが足場を指示する
「右、そこ段あるから」
moro が続ける
「いいよ、そのまま降りて」
末吉は無言だった
ただ、確かめるように一段ずつ降りる
あの滑落の感覚が、身体に残っている
だが今度は違う
支えがある
仲間の声がすぐ傍にある

それが、確実に身体を動かしていた
一段
また一段
時間が永遠に引き延ばされる感覚だ
やがて
最後の足場に足が届く
地面
その感触が、全身に広がる
「……降りた」
末吉が呟く
その瞬間、張り詰めていたものが一気にほどけた
全員が降りきった時、誰もがその場で立ち尽くした
言葉は出ない。ただ、呼吸だけが荒い
やがて、moro が笑った
「ほんと……最後まで気抜けないね」
ジンもわずかに笑う
「ああ。だから剱なんだろうな」
振り返ると、通ってきた岩壁が静かにそびえている
厳しさも、恐怖も、そのままに

だが六人は、それを越えてここにいる
風が、やわらかくなっていた

第八章　前剱、最後の壁

カニのタテバイを降り切った時、六人の身体から一気に力が抜けた
張り詰めていた呼吸
岩に貼りついていた感覚
落ちれば終わるという緊張
そのすべてから、ようやく解放された
はずだった
だが前方にそびえる岩稜を見た瞬間、ジンは小さく息を吐いた
前剱
黒い岩肌が、残雪の白を裂くように突き出している
雪はまだ深く残り、踏み跡は無い
陽が傾き始めたことで、雪面は再び硬く締まり始めていた
「……最後まで楽させてくれないな」
末吉が乾いた笑いを漏らす

誰も否定しなかった
ここまでで、体力はほとんど削り切られている
足は重く、指先の感覚も鈍い
集中を切らせば、一瞬で持っていかれる
「気抜くな。剱に登頂した。そしてカニのヨコバイ、タテバイを通過した安心感。その気持ちが有るからこそ、ここが一番危ない」
ジンの声は低かった
疲労した下山時ほど、事故は起きる
全員、それを知っていた
前剱への登り返しが始まる
急斜面の雪にアイゼンを蹴り込む
硬い雪面が、ガツン、と金属音を返した
一歩
蹴り込む
息が上がる
太腿が悲鳴を上げていた
moro が小さく顔を歪める
「脚、終わってきた……」
「ゆっくりでいいから」

やまが即座に返す
HARIBO は黙ったまま雪面を睨んでいる
その肩が上下していた
末吉はピッケルを強く握りしめる
滑落した時の感覚が、まだ身体に残っている
怖い
その感情が、消えない
だが足を止める方が、もっと怖かった
ジンは先頭で雪を切る
足場を確かめ、岩を選び、全員が通れるラインを探していく
「右の岩、使える。そこ乗れ」
短い指示
エコが最後尾から全員を見守る
「焦らなくていい。確実にね」
風が吹き抜ける
汗で濡れた身体から、一気に熱が奪われた
寒い
だが止まれない
前剱の岩場は、登りも下りも容赦がなかった

鎖に頼りすぎればバランスを崩す
雪に乗りすぎれば足を取られる
岩だけを信じても、凍結した部分が牙を剥く
技術と精神
そして、残された体力
そのすべてを使い切るような時間だった
やがて、最後の岩場を越えた瞬間
ふっと傾斜が緩む
誰からともなく、その場に座り込んだ
息だけが響く
「……終わったぁ……」
HARIBO が空を見上げたまま呟く
末吉は雪の上で大の字になる
「剱、最後まで本気で殺しにくる……」
moro が苦笑する
「ほんと、それ」
やまは静かに剱岳を振り返っていた
夕陽を受けた山体は、赤く、鋭く、どこまでも厳しい
「……でも、綺麗だな」

その言葉に、全員が振り返る
剱が、そこにあった
恐ろしく
厳しく
そして、どうしようもなく美しく
ジンはその姿を見つめながら、小さく息を吐いた
「ああ……だから、また来たくなるんだろうな」
誰も答えない
だが、その沈黙が答えだった
HARIBOが突然、がばっと顔を上げる
「いいこと考えた！」
全員の視線が集まり、そして全員が声を発する
「またぁ何時もぉ」
HARIBOは得意げに
「もう次から、夏山だけにしない？雪なし！鎖なし！滑落なし！それと夏だけど汗かき一つもなし！」
一瞬の沈黙
そして
「それって、ただの観光じゃない」
やまが即座に突っ込んだ

末吉が吹き出す
エコも堪えきれず笑う
「いや、でも、安全山行は超大事よ!?」
HARIBO は本気で反論する
「剱来といて今さら何言ってんの」
moro は呆れたように肩をすくめる
「だって怖かったんだもん！」
その言葉に、今度は全員が笑った
乾いた冬の空気の中に、ようやく人の声が戻る
少し前まで極限の顔をしていた六人が、今は子供みたいに笑っていた
ジンはその様子を見ながら、小さく息を吐く
ああ、戻ってきたな
そんな気がした

エピローグ　稜線に残るもの

立山室堂へと続く道は、どこか現実味を取り戻していた
斜面はやわらぎ、風も丸くなっている

さっきまで命を削るように歩いていた場所と、同じ山とは思えない
それでも振り返れば、そこに剱がある
鋭く、静かに、何も語らずに立っている
あの場所で味わったすべてが、胸の奥にまだ残っていた
滑落の恐怖
凍てつく夜
感覚を失いかけた指先
そして、頂に立ったあの瞬間
どれ一つとして、軽いものはなかった
末吉が足を止める
カメラを構えるが、すぐにはシャッターを切らない
「……なんかさ、うまく撮れない気がする」
その言葉に、moro が笑った
「そりゃそうでしょ。あれは、撮るもんじゃなくて心に刻むもんだよ」
HARIBO が小さく頷く
「うん……まだ、ここにある」
胸に手を当てる
やまは静かに言う
「全員が剱を身体中に溢れるほど取り込んだね」

エコは深く息を吐いた
「ギリギリだった。でも……越えた」
ジンは何も言わず、ただ剱を見つめていた
あの山は、変わらない
挑む者を拒みもせず、受け入れもせず、ただそこにある
それでも確かに感じた
頂きを踏んだ、という感覚を
六人は再び歩き出す
それぞれの足取りで
もう登る必要は無いはずなのに、何度も振り返る
そこには、あの時間があるからだ
極限の中で交わした声
差し出された手
繋がったザイル
誰か一人でも欠けていたら、ここにはいない
それが、すべてだった
やがて室堂が近づき、人の気配が戻ってくる
日常の音が、少しずつ混じり始める
それでも、胸の奥の静けさは消えない

ジンがふと足を止めた
「……また、行くか」
誰に向けた言葉でもない
だが
「行くに決まってるでしょ」
moro が即座に返す
末吉が笑う
「次はもっといい写真撮るよ」
HARIBO も、やまも、エコも、黙って頷いた
言葉はいらなかった
あの山で、交わした約束は果たした
だけど終わりじゃない
ここから、また始まる
風が、背中を押した
稜線を渡ってきた風は、今も確かに彼らの中で吹いている

――――　完　――――

jinjinさんのシリーズの１作目『稜線を渡る風たち』は
以下の二次元コードから読むことができます。

白き山嶺の果て

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　jinjin

令和８年度 函南町立図書館８月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

命を預け合い、雪の剱岳を歩く六人。滑落、凍てつく夜、恐怖の岩稜を越えた先で、彼らが見つけたのは頂きではなく、生きることの意味だった。